



死に方のお話

みなさん、こんにちは。大間病院の藤原です。今回は結構重い話です。

みなさんは、ご自分や大切な人が死ぬときのことを考えたことはありますか？

ご自分の寝床で、自宅で、あるいは病院のベッドで、ご家族に見守られながら穏やかに息を引き取るといった情景を想像する方が多いと思います。

しかし、そんな穏やかな最期は無条件には迎えることはできません。どこかであなたが急に倒れたとします。目撃者は救急車を呼び、駆けつけた救急隊はあなたの心臓が止まっているのを確認すると、心臓マッサージを行い、マスクや気管チューブを用いた補助換気を開始します。そのほか蘇生行為をおこないつつ、あなたを病院まで運んでいくのです。病院に到着してからも蘇生行為は継続されます。実際の心臓マッサージは心臓を再び動かすために、体重をかけて胸の真ん中を強く深く押し込むため、肋骨がへし折れ、ときに肺が破け、のどから血が吹き出ることもあります。蘇生行為とはそうまでしてようやく一命を取り留められるか否かという行為です。現在の日本における病院の外で心停止した人が命を取り留めた割合はおよそ十数%で、80歳を超えると5%以下になります。救

急隊が現場に駆けつけて心停止しているのを確認したら、心停止からかなりの時間が経過していることを確認しない限りは、上記のような蘇生行為を行いながら病院に搬送しなければならない決まりになっています。



わたしはこれまで、たくさんの心肺蘇生を経験してきましたが、「これは助からない」と思いながらも蘇生行為を行わざるを得なかった方々がたくさんいました。本人が「最期まであがきたい」という考えならそれでも良いと思いますが、「最期にそんなに傷つくくらいなら、きれいな状態で逝きたい」と思う方にとっては非常に悲しい最期となってしまいます。

できるだけ、きれいに最期を迎えたいと思っていられる方は、まずご家族と、ご自分の最期について話し合ってみてください。大間病院では在宅看取りや施設看取りも行っています。もちろん、まだまだピンピンしている方に適応できるものではありませんが、「正直言ってそろそろお迎えが来そうだな、でも最期は、肋骨ボキボキはいやだな、穏やかに逝きたいな」と思っている方、もしくはそのご家族の方は、一度大間病院に相談してみてください。

大間病院の先生方を紹介します

令和3年度、4月から新しく大間病院に赴任された先生方を紹介します。



名前
中田 健一郎
担当科
内科
趣味・特技
旅行



名前
落合 秀也
担当科
内科
趣味・特技
空手道・将棋・
ボウリング